コロナ禍で子ども食堂が工夫していること
名古屋市緑区のかたろう食堂の実践から

大畑伸太郎

論文要旨

本稿は、子ども食堂が抱えるとされている課題について考えていく。まず、課題としてよくあがっている、ボランティアスタッフの不足について考えていく。実際に、子ども食堂を運営しているスタッフの方々がスタッフ不足を感じているのか、愛知県内の子ども食堂を対象にしたアンケートをもとに考えていく。ボランティアスタッフは実際に不足しているのか、そしてボランティアスタッフを増やすにはどのようにしていくと良いのかをアンケートをもとに考える。

次に、子ども食堂が現在抱える最も大きな課題であるコロナ禍での活動について考える。新型コロナウイルスが流行したことによって、3 密を避けるために一時期活動を休止する子ども食堂が多かった。緊急事態宣言が解除されてから活動を再開する子ども食堂は出てきたが、今まで通り子ども食堂で食事を提供することはなかなか難しくなっている。このコロナ禍で、どのような活動ができるのか、実際にどのような活動ができるのか考えていく。

そして、子ども食堂で食事を提供すること、必要性について改めて考える。

第一章　子ども食堂が抱える課題とは何か

本稿では、最近新聞やニュースでよく耳にするようになった「子ども食堂」について取りあげ、その子ども食堂が抱えているとされる課題について考えていく。

まず初めに、子ども食堂とは、地域の人たちが主体となって、無償または低価格で子どもたちに食事を提供するコミュニティの場のことである。子ども食堂という名前ではあるが、対象者は子どもだけではない。ご年配の方や、親御さん、学生、地域に住んでいる人たちや、その地域以外の人たちも足を運び、交流ができる場所となっている。

そんな子ども食堂が抱える課題とは一体何か。よく挙げられるものとして、ボランティアスタッフの不足がある。ボランティアスタッフは、子ども食堂を運営していく上で必ず必要である。子ども食堂の開催準備をするにあたって、場所の準備、食材の調達から調理など、やることがたくさんあり、子ども食堂の要とも言える。そんなボランティアスタッフが不足してしまうと、運営が滞るのではないだろうか。では、実際に子ども食堂ではスタッフ不足は不足しているのだろうか。まず一つ目に、子ども食堂が抱える課題として、スタッフ不足について考えていく。

そしてもう一つ本稿で考える課題は、現在子ども食堂が抱える最も大きな課題だと言えるコロナ禍での子ども食堂の活動についてだ。新型コロナウイルスが流行したことによって、3 密を避けるため、一時期多くの子ども食堂は活動を休止した。緊急事態宣言が解除されてから、段々と活動を再開する子ども食堂が増えてきたが、コロナ禍以前の者とは全く異なったかたちでの再開となっている。このコロナ禍で子ども食堂ができることはいったい何なのか、どのように活動しているのか。私がボランティアとして参加させていただいている「かたろう食堂」の活動をもとに考えていく。

第二章　子ども食堂のボランティアスタッフは不足しているのか

愛知県内の子ども食堂では、ボランティアスタッフは不足しているのだろうか。私は、ボランティアスタッフはそこまで不足していないと考える。その理由を私の子ども食堂でのボランティア経験と、愛知県内で開催されている一部の子ども食堂(59 か所)に協力していただいたアンケートの結果をもとに説明する(今回はコロナ禍以前の 2019 年に集計したアンケートをもとに考える)。

私は愛知県内で開催されている 4 カ所の子ども食堂に参加した。私が参加した子ども食堂(4 カ所)では、開催日に集まるスタッフの人たちの顔ぶれがほとんど同じで、その固定されたメンバーで調理など仕事の分担をして運営していた。ボランティアとして参加した私がいてもいなくても変わりない段取りの良さと連携で調理・配膳等の準備をして食事の提供をしていたため、スタッフが不足しているとは感じなかった。

また、完全予約制にして、人数を制限して開催している子ども食堂もあった。この予約制にすることはスタッフ不足に悩まされない一つの要因だと考えられる。予約制にすることで、何時に何人来るか、どれだけ食材を用意すればいいかが分かる。そうなれば、新しくスタッフを募集しなくても既存のスタッフだけでも対応できる。予約制にする理由は、来てくれた人に確実に食事を提供できるために、来る人数を把握し、人数分の食材を調達し、食材が余るのをできるだけ防ぐことができるためだが、スタッフ不足にならない事にもつながっていると考えられる。

そして、図 1 から愛知県内の一部の子ども食堂の運営者の方々はあまりボランティアスタッフが不足していると感じていないことが分かる。図 1 は愛知県内の一部の子ども食堂(59 カ所)の運営者に「運営をするにあたって、スタッフの数は足りているか」という問いに対しての回答の結果を円グラフにしたものである。愛知県内で開催されている一部の子ども食堂(59 か所)の中で、64.4%(38 カ所)の子ども食堂がボランティアスタッフは「だいたい足りている」、30.5%(18 カ所)が「開催回による」、5.1%(3 カ所)が「不足している」と回答した。

今回のアンケートに協力してくださった子ども食堂の中では、約 60%がボランティアスタッフは足りている状況だった。このように、ボランティアスタッフが足りている理由として何が考えられるか。私は、子ども食堂がスタッフを募集する方法と子ども食堂が開催地域でどのように知れ渡っているか、この二つに理由があると考えた。次の章では、子ども食堂がスタッフを募集する方法を調べ、ボランティアスタッフが不足しない理由と直接関係があるかを見ていく。

第三章　スタッフの募集方法によってボランティアスタッフは不足しなくなるのか

私は、ボランティアスタッフが不足しない理由はスタッフを募集する方法が関係すると考えた。そこで、クロス集計を用いて関係があるかどうかを導き出した。クロス集計をすることによって、この二つに関係があるかないかが分かる。表1～表6は、アンケートにある問いの「子ども食堂を運営するにあたって、スタッフの数は足りていますか」と「子ども食堂を運営するスタッフの募集方法として、使用している手段は何ですか」をクロス集計したものである。その結果、どれも有意差が認められなかったため、スタッフの募集方法によってボランティアスタッフが不足しなくなる直接的な理由であるとは言えなかった。しかし、私はボランティアスタッフ不足しないためにはスタッフを募集する行為は必

要であると考える。子ども食堂はあくまでボランティア活動であるため、毎回開催日に同じスタッフが全員必ず集まれるわけではない。もちろん、スタッフの方々は子ども食堂を開催するために毎回入念な準備をして、いろいろな人たちのために休むことなく活動してくれている。それでも、急遽参加できなくなる人もいるだろう。急な欠員が出たとしても、それをカバーできる数のスタッフを確保できていれば、スタッフ不足を感じなくなることにつながるのではないだろうか。そこで、子ども食堂で使用されているスタッフの募集方法はどんなものがあり、よく使用されるものは何なのかを表1～表6を見て調べていく。

表1～表6を見て、一番多く使用されていたスタッフの募集方法は、「子ども食堂の関係者や子ども食堂に参加したことがある人にメールをする」というものだと分かった。59カ所の子ども食堂のうち16カ所が使用していた。次に多かった募集方法は、59カ所中15カ所の子ども食堂が使用していた「SNS」である。そして「チラシを配布する」が12カ所と3番目に多かった。子ども食堂のスタッフはほとんど大人である。「SNS」のTwitterやInstagram等でスタッフの募集を呼びかければ、子ども食堂に興味を持っている人たちの目に留まり、スタッフとして参加してくれるかもしれない。この方法の良い点は、SNS上でスタッフ募集を呼びかけていれば、全国の誰もが見てくれる可能性があり、そこから実際に子ども食堂へ足を運んでくれる人が現れ、スタッフが増えるかもしれないという点である。しかし、子ども食堂は地域ごとで開催されるため、全国のいろいろな人に情報が行き届いても、情報を受け取って参加したいと思った人の住む地域とは遠く離れた場所で開催されていた場合、気軽に足を運ぶことができないということがある。そうなってしまっては、せっかく情報が届いてもスタッフを補充することにはつながらない。

子ども食堂のスタッフは、やはり開催されている地域に住んでいる人や、その地域の近くに住んでいて、気軽に参加できるような人が望ましい。また、子ども食堂を運営していくにあたって、信頼できる人や責任をもって活動してくれる人がスタッフにいてくれるとなおのこと良いだろう。そう言ったことから、「子ども食堂の関係者や子ども食堂に参加したことがある人にメールをする」という募集方法が一番多く、「チラシを配布する」募集方法が「SNS」の次に多かったと考えられる。

子ども食堂の関係者や子ども食堂に参加したことがある人であれば、子ども食堂のことについても理解しており、興味を持っているものだと考えられる。また、一度参加している人であれば、運営しているスタッフの人たちも、参加してくれた人がどんな人なのか、一緒に活動した中で少しは分かるだろう。参加した側も、どのような活動をして、どのような雰囲気で活動しているか分かる。お互いに良い印象を受けていた場合、メールで募集をかけたら次も参加してくれる可能性が高い。そこから、毎回参加してくれるようになればスタッフが補充される。

チラシの配布もメールと同様に、一度参加してくれた人に開催日や開催時間を書いたものを渡せば、一度きりの参加にならず、何度も参加をしてくれるかもしれない。そして、子ども食堂を開催している地域内でチラシを配布すれば、興味を持ってくれた人が参加してくれる可能性がある。「SNS」と違い、特定の地域内で募集をかけることでより確実に参加者を集めることができる。

しかし、この「子ども食堂の関係者や子ども食堂に参加したことがある人にメールをす

る」方法と、「チラシを配布する」方法が効果をより発揮するためには、一度子ども食堂に参加してもらわなくてはならない。つまり子ども食堂を開催していることがより多くの人に伝われば、ボランティアスタッフの参加者が増える可能性があるということである。

次の章では、子ども食堂の開催告知方法について調べていく。

第四章　子ども食堂の開催告知と子ども食堂を知ったきっかけ

子ども食堂の運営者が実際に使用している開催告知方法はどのようなものがあり、どの方法が一番よく使用されているのだろうか。図 2 を見て考えていく。

図 2 は、子ども食堂の運営者が実際に「子ども食堂の開催告知方法として使用している手段」をまとめたものである。このグラフを見ると、一番多く使用されているのは「チラシ配布」で、59 人中 47 人の運営者の方々が使用していると回答した。二番目は「SNS」で、33 人が使用していると回答した。三番目は「団体のウェブサイト」と「ポスター掲示」が 17 人と同数になっており、続いて 15 人が「地域の掲示板」、7 人が「関係者や参加したことがある人にメール」をそれぞれ使用していると回答した。また、16 人の運営者の方々がその他を回答し、その中で一番多かったものは「地域の回覧板」で、3 人が回答した。それ以外の回答としては、「口伝え」「団体のパンフレット」「地域の情報誌」「小学校の各教室で掲示」「学習支援団体の募集・通知」「社協」などがあった。

「SNS」よりも「チラシ配布」が多く使用されている理由としては、子ども食堂は主にその地域に住んでいる子どもたちを対象として開催されるためである。「SNS」での告知では、スマートフォンやパソコンを持っていなければ開催時期を知ることができない。現代の小学生が、現代の学生や社会人の世代よりもスマートフォンやパソコンに触れる機会が多いからと言って、自分専用のスマートフォンやパソコンを持っている小学生はまだ少ない方だろう。

そのため、地域内でチラシを直接配った方が、「SNS」よりも子どもたちの目にも留まり、直接、簡単に知ることができる。ポスター掲示や地域の掲示板が使用される理由も同じである。

それでも「SNS」が二番目に多く使用されている理由は、現代のネットワークでは、情報がすぐに広まりやすいためである。子どもがいる親御さんや、子ども食堂に興味がある大人へ向けて「SNS」での開催を告知することで、大人から大人へ、親から子どもへと伝わり、子どもたちが興味を持ったり、親子で参加したりすることにつながるだろう。

図 2 から、子ども食堂の開催告知方法としてよく使用されているものが分かった。では、それらの方法は実際に機能しているのだろうか。大人と子どもの子ども食堂参加者に、子ども食堂を知った経緯について聞く。参加者がどのようにして子ども食堂が開催されていることを知ったのかが分かれば、子ども食堂側もどのようにして開催告知をしていくとより良いのかが分かるだろう。図 3 と図 4 を見て、子ども食堂を知った経緯について調べていく。

図 3 は、子ども食堂に参加している大人の方々に「子ども食堂を知った経緯」について聞いたアンケートの結果をまとめたものである。一番多かったのが「チラシやポスター」で 106 人、二番目に多かったのが「友人・知人の紹介」で 104 人、三番目に多かったのが「子ども食堂のスタッフの紹介」で 47 人となった。続いて、「子ども食堂の SNS」が 34 人、「インタ

ーネット情報」が 20 人、「新聞・テレビ・雑誌等」が 10 人、「機関紙」が 4 人、「講演会・セミナー」が 2 人となった。

二番目と三番目に多かった「友人・知人の紹介」と「子ども食堂スタッフの紹介」は、まとめてしまえば、どちらも「地域内での大人同士の交流・友好関係」が子ども食堂を知るきっかけになっている。そのように考えると、「チラシやポスター」よりも「友人・知人の紹介」と「子ども食堂スタッフの紹介」をまとめた「地域内での大人同士の交流・友好関係」が、大人の人たちが子ども食堂を知った経緯としては一番多いと言える。

図 4 は、子ども食堂に来た子どもに、どんなきっかけで子ども食堂に来たのかを聞いたアンケートの結果をまとめたものである。一番目に多かったのは、「チラシやポスター」で 123 人、二番目に多かったのは、「友達の紹介」で 101 人、三番目は開催しているのを「見かけた」で 12 人、四番目は「新聞・テレビなど」で 9 人となった。その他が 106 人と多く、回答欄に記入してあるものでは、「母の紹介」が 24 人、「おばあちゃんや親の紹介」が 14 人という回答が多かった。まとめてしまえばどちらも「家族の紹介」となり、合わせて 38 人の子どもたちが「家族の紹介」で子ども食堂を知ったことになる。

子ども食堂に来たことがある人たちは、大人も子どももそれぞれ「チラシやポスター」をきっかっけとして知ったと回答した人が一番多かった。この「チラシやポスター」は、運営者が使用している子ども食堂の開催告知方法の中でも一番目と三番目に多いものである。このことから、運営者側が使用している開催告知方法が上手く機能していることが分かり、「チラシやポスター」はその地域に住んでいる人々に広める手段としては効果的であると言える。

また、子ども食堂が開催されていることを地域内のより多くの人に知ってもらうためには、地域内での友好関係や交流、つまり、つながりが大切になってくると言える。大人も子どもも「チラシやポスター」の次に知ったきっかけとして多かったのが、「友人・知人から(友達)の紹介」である。そして、大人は「子ども食堂のスタッフの紹介」、子どもは「家族の紹介」が知ったきっかけとして、それぞれ三番目に多い。このように、アンケートの結果から、友人・知人・家族というように、誰かから紹介されて子ども食堂を知った人たちが多いことがわかる。

子ども食堂は、一人でも気軽に参加できる場所であるが、友人・知人・家族からの紹介で子ども食堂を知った参加者が多いことから、子ども食堂に初めて足を運ぶ人は、一人で行くのではなく、誰かと一緒に参加している人が多いともいえる。確かに、初めて参加するときは、どういう場所で、何をしているのかも詳しく分からないので、入りづらいと思う人もいるかもしれない。だからこそ、親と一緒に参加したり、友達と一緒に参加したりする人が多いのだろう。子ども食堂が自分の住んでいる地域で開催しているのを知っていて、気にはなっているが、一人だとどうしても入る勇気がない、という人もいるだろう。そういった人たちに、すでに子ども食堂に参加していて、「一緒に参加してみない？」と声をかけてくれる友人・知人がいた時、子ども食堂のつながりはさらに広がっていくことだろう。

今回の調査で、子ども食堂を開催している地域内で知ってもらうためには、地域でのつながりが大切だと分かった。そして、子ども食堂の運営者が開催告知方法としては、一番多く使用されている「チラシ配布」も効果的で、よく機能していた。

第五章　開催告知方法の組み合わせ

様々な開催告知方法があった中で、「チラシ配布」がより効果的だとみられる。子ども食堂では開催告知方法を「チラシ配布」のみ使用しているところもあるが、いくつか併用しているところも多い。では、開催告知方法を組み合わせて使用したとき、より参加人数を増やしていける組み合わせはあるのだろうか。開催告知方法の組み合わせと、子ども食堂に参加している子どもと大人の参加人数平均を見て、より人数が集まる方法があるか、表 7～12 を見て調べていく。

まず初めに、表 7 を見てみる。表 7 は開催告知方法が 1 通りのみの子ども食堂をまとめたものである。1 通りの手段だけで開催告知をしている子ども食堂は 59 カ所中 9 カ所だった。1 通りの中で「チラシ配布」は 9 カ所中 3 カ所の子ども食堂が使用していた。

また、「関係者や参加したことがある人にメール」をして、参加している子どもが平均 20 人と 1 通りの中では多いことが分かる。メールはスマートフォンを持っていない子どもたちには届かないため、子どもたちの親にメールをして、開催する日時を告知しているものと考えられる。そこから、親が子どもと一緒に参加したり、参加を促したりしているのだろう。

次に、表 8 を見てみる。表 8 は 2 通りの開催告知方法を使用している子ども食堂をまとめたものである。2 通りの手段で開催告知をしている子ども食堂は 59 カ所中 23 カ所と最も多かった。そして、全体で一番多く使用されていた組み合わせは「SNS+チラシ配布」で、23 カ所中 10 カ所もの子ども食堂が使用していた。

表 7～表 12 を見て、開催告知方法の組み合わせとして一番多かったのは「SNS+チラシ配布」で 10 カ所。子どもの参加人数平均は 38 人。二番目が「ウェブサイト+SNS+チラシ配布」で 5 カ所。子どもの参加人数平均は 25 人。三番目が「チラシ配布+地域の掲示板」で 4 カ所。子どもの参加人数平均は 16 人。そして四番目が「SNS+地域の掲示板+チラシ配布+ポスター掲示」で 3 カ所。子どもの参加人数平均は 32 人だった。

1 通りのものから 6 通りのものまでを見ていくと、開催告知の手段を多く組み合わせても、参加人数が増えていくとは言い難い。逆に、開催告知を 1 通りや手段の少ない組み合わせで行なっても多く集まるところは多く集まっている。

この結果から、開催告知方法の組み合わせとして、何が一番効果的か、ということははっきりとは分からなかった。今回のアンケート調査に協力していただいた愛知県内の子ども食堂の中では、「SNS+チラシ配布」が一番多く使用されていたが、この手段、この組み合わせであるから人が集まる、とは言えない。

今回の調査で、子ども食堂の開催を知ってもらうためには、地域内での交流が特に重要であるということを改めて感じた。子ども食堂は地域で寄り添っていける場である。地域外からの参加も光栄なことであるが、まずは地域内のつながりである。先に述べた子ども食堂を知ったきっかけとして、友人・知人・家族など、自身の周りにいる人からの紹介が多いこと。この結果がよく物語っている。チラシ、SNS、ポスターなど、広める、知ってもらう手段としては間違いではないし、あった方が確実によい。

しかし、実際に子ども食堂に足を運ばせるには、チラシやポスターなどの紹介文ではまだ足りない部分があるかもしれない。それらよりも、親族や、友人・知人といった信頼できる人から誘われた方が、実際に足を運んでみようと思うだろう。そうして知った子ども食堂をまた、人へ人へと伝えていけば、地域内の人たちは知らないという事態にならないだろう。

子ども食堂はスタッフ不足が課題だと言われることがあるかもしれないが、今回の調査結果からも分かるように、不足だと感じている子ども食堂は実は少ない。私も実際にボランティアとして複数の子ども食堂に参加したが、普段からスタッフとして参加している固定メンバーなる方々が段取り良くスムーズに調理や配膳を行っているため、逆に仕事を増やしてしまうことがある。私が今まで参加した子ども食堂でも、ボランティアスタッフが足りなくて困っているという話は聞いたことがない。今回の結果も納得がいく。

子ども食堂を広く知ってもらうには、まずは地域内での交流、つながりの輪を広げていくことが大切である。それと同時に「SNS」などのメディアでの情報発信をすること。このアナログな方法とデジタルな方法の両方を同時に行うことで、一歩ずつ進んでいくことだろう。

第六章　コロナ禍での活動

私は、子ども食堂が抱える課題の一つとされているボランティアスタッフの不足を無くしていくには、まず、子ども食堂の開催を知ってもらい、参加人数を増やしていくことが大切だと考えた。そして、開催していることを知ってもらうためには、地域内で交流し、地域でのつながりの輪を広げていき、それと同時に「SNS」などのメディアでの情報発信をしていくと良いと前章までで述べた。しかし、現在のコロナ禍では今までのように一つの場所に集まって皆で交流を深めていく、ということが難しくなってしまった。

ここからは、子ども食堂が現在抱えている最も大きな課題だと考えられるコロナ禍での活動について考えていく。

新型コロナウイルスが世界中で流行し、日本では新型コロナウイルス対策として、3 密にならないようにすること、そしてソーシャルディスタンスに気をつけることが特に重要とされるようになっていった。この 3 密とソーシャルディスタンスに気をつけることが、子ども食堂の活動を続けていく障害となった。

3 密とは、密閉、密集、密接から名づけられた言葉である。この 3 つの「密」は、日本における新型コロナウイルスの集団感染が起こった場所の共通点を探した際に、この 3 つの密が共通となっていることが分かり、新型コロナウイルス感染症を避けるためにもこの 3 密を控えるようにすることを求められている。

まず、密閉とは、窓が無かったり、換気ができなかったりする場所のことで、会議室や地域の多目的室等、塾や図書館、カラオケボックスなどがこれにあたる。部屋の広さではなく，換気の程度が重要とされる。

次に、密集とは、人がたくさん集まったり、少人数でも近い距離で集まったりすることである。人がたくさん集まる場所として挙げられるのが、テーマパークや大型の商業施設、スーパー、学校、電車、喫煙所等がこれにあたると考えられる。少人数でも近い距離で集まったりする場所として挙げられるのが、ライブハウスや喫茶店、レストラン等がこれにあたると考えられる。

最後に、密接とは、互いに手が届く距離で会話や発声、運動などをすることをいう。密接はどんな場所でも起こりえる。職場、飲食店、公共交通機関内での会話や、グループでのランニングやウォーキング、スポーツジム内で多人数での運動などがある。

ソーシャルディスタンスは、日本語では社会的距離を意味する。新型コロナウイルスの感

染経路の一つである飛沫感染は、くしゃみや咳によるしぶきによって他者へ感染をさせてしまう。このくしゃみや咳によるしぶきが到達する距離が、くしゃみで 3m、咳で 2mと言われている。この距離も加味して厚生労働省では、保つべき距離として相手との距離を 2m程(最低でも 1m)取ることを推奨している。この感染拡大を防ぐための社会的距離の確保、人的接触距離の確保として、ソーシャルディスタンスという考え方が提唱された。

これら 3 密とソーシャルディスタンスは子ども食堂を運営していく上でとても密接に関わってくる。

子ども食堂は、地域の公民館や民家等で開催されることが多く、開催する場所によっては窓の数が少なかったりする。そのため、換気が十分に行われていないと感じ、3 密の一つである密閉になってしまうと思う参加者も少なからずいるだろう。

また、子ども食堂は同じ空間に人が集まって近い距離で食事をするため、3 密の密集と密接に引っかかってしまい、また、ソーシャルディスタンスも取れていない状態になってしまっている。これらのことを気にして、今まで参加していた人たちも、子ども食堂に行くことをためらったり、参加を拒んでしまったりする人も出てくるだろう。

新型コロナウイルスが流行し、世間の人々は感染をしないように 3 密やソーシャルディスタンスに気をつけるようになり、そして必ずと言っていい程外出する際にはマスクをつけるようになった。新型コロナウイルスに感染した者は世間から冷たい目で見られ、何も悪くないのに誹謗中傷を受けるといった、酷い扱いをされることも多々あった。また、一時期飲食店やカラオケなど、人が集まる場所に足を運ぶこと自体が悪いという風潮になっていた。そういった意味では、子ども食堂も例外ではないため、参加する側もなかなか行きづらくなってしまい、子ども食堂を運営する側も開催をするべきかどうか、かなり悩みどころとなっていたことだろう。

では、このような状況で子ども食堂を今までと同じように開催し、食事を提供する場、地域のコミュニティの場として続けていくことは可能なのだろうか。答えはＮＯである。現在のコロナ禍では、今までと同じように子ども食堂を続けていくことが厳しい状況となっている。このような厳しい状況の中で、どのように子ども食堂を運営、開催していけばよいのか。私が参加させていただいている子ども食堂の「かたろう食堂」のコロナ禍での活動を紹介していく。

「かたろう食堂」は、密になるため食事の提供は止めているが、パンやジュース、お菓子等を子どもたちに渡すなどをして、子どもたちとの交流・会話を保つようにしている。そして、「かたろう食堂」の近くにある公園で遊ぶ子どもたちを見守る「外遊び応援隊」も新しく始まった。この活動の良いところは、公園は外で広々とした空間であるため、三密の密閉にはならず、また、密集、密接においてもある程度人と人との距離を置くことで回避することができる。

公園で遊ぶ子どもたちも、新型コロナウイルスに感染しないように手洗いうがいなどを心掛けていて、外で遊ぶ時もちゃんとマスクをして感染しない事、誰かに感染させない事を強く意識していた。毎日ニュースで新型コロナウイルスについての報道がされ、学校の休校など子どもたちの日常生活にも大きな影響を与えているため、新型コロナウイルスの危険性をとても実感していることからの強い意識が生まれているように思えた。

「外遊び応援隊」以外に、子ども食堂内(室内)での活動も行っている。人数制限をして(5

名程)ビーズ作りをしている。これは高校生のボランティアさんがいろいろな種類のビーズを組み合わせてアクセサリーなどを作ってくれるというものだ。たくさんビーズが用意されているため、その中から好きな色や形のビーズを選んで、指定したアクセサリーの形に高校生ボランティアさんが作ってくれる。また、作り方なども教えてくれる。

室内での活動も新型コロナ対策を徹底した上で行われている。室内は窓が開けられ、換気も十分にできており、テーブル等もアルコール消毒されている。また、室内に入る際には手をアルコール消毒する。そして、参加者には検温をしてもらい、その日の体温、体調をチェックシートに記入するようになっている。体温が 37.5 度以上ある人や体調が優れない人は参加できないようにしている。また、もし新型コロナウイルスに感染してしまった人が参加者の中から出てしまった際に、参加者全員に連絡ができるようにチェックシートには氏名と住所、連絡先も書くようになっている。

このように、子ども食堂側が今できる限りの新型コロナ対策をし、子ども食堂に参加する側も新型コロナ対策をし、互いに気をつけていくことでコロナ禍でも開催が可能になっている。

では、特にどのようなことに気をつけているのか。次の章では、「かたろう食堂」を運営しているスタッフの方々や参加している子どもたちの声を聞いていく。

第七章　コロナ禍で気をつけていること

私たちは、コロナ禍での子ども食堂についての独自のアンケートを作成し、「かたろう食堂」の運営スタッフの方々や参加者にアンケートに協力してもらった。そのアンケートからコロナ禍で気をつけていること等、それぞれの声を見ていく。

まずはコロナ対策について見ていく。「かたろう食堂」を運営しているスタッフの方に「かたろう食堂」での「コロナ対策は何をしていますか？」という質問をした。その答えが以下の通りである。

・食事の提供を中止しています。
・感染予防の為入室も中止しています。
・食事の提供のかわりにおやつ等を渡しています。その時には、ソーシャルディスタンスを守ってもらっています。また、マスクの着用、体調管理(体調不良時は参加しない)等を利用者、スタッフ共に、守りながらの活動をしています。また、団体のホームページ等で伝えています。

以上のコロナ対策については、第六章でも述べた通り、「かたろう食堂」に参加している私から見てもスタッフの方々が心掛けていることは実際に徹底されていると思った。入室の中止については室内の換気や消毒、体調管理等に気をつけた上で現在(2020 年秋頃)は緩和されている。

次に、スタッフの方々に「自分自身で気をつけているコロナ対策は何ですか？」という質問をした。その答えが以下の通りである。

・あまり外へ出かけない。

・買ってきた物などや、手洗い消毒に気をつけています。
・子どもにマスクは絶対つけさせる。
・人の集まるところに行かない。
・手洗い除菌などをこまめにする。
・施設の消毒等、三密を避けることに気をつけています。
・自分自身の体調管理、手指消毒。

「かたろう食堂」に参加している子どもたちに「コロナにかからないために気をつけていることはありますか？」という質問をしたところ、全体の 8 割以上の子どもたちが「マスクをつける」と回答していた。次に多かった回答は「手洗いうがい」、続いて「3 密を避ける・ソーシャルディスタンスをする」だった。

自分自身で気をつけているコロナ対策で多かったものは、大人のスタッフは「手洗い消毒」、「三密を回避する」であったのに対し、子どもは「マスクをつける」であった。私は、大人のスタッフと子ども、共に新型コロナ対策としてマスクをつけることが一番多くなるだろうと考えていた。しかし、大人のスタッフの方々は対策として「マスクをつける」ことを意識している人が少なかった。これは決して実際にマスクをつけることをしないわけではなく、マスクをつけない主義の人が多いというわけでもない。コロナ禍の日本では、新型コロナ感染対策としてマスクをつけることが当たり前になっており、外出した際にマスクをしていない人がいた場合、その人は周りの人から非常識な人間であるかのような視線にさらされることもある。そうした「マスクをしていない者は悪」とされがちな風潮が、日本人に外出時にマスクをつけることが絶対という意識を植え付けた。このようにして、マスクをつけることが服を着ることと同じような感覚に変わってきたため、大人の方が、意識して感染対策をするのではなく、無意識に感染対策ができるようになってきたことが、この回答の違いから考えられる。

大人と子どもでのマスクにおいての無意識下の感染対策、意識下の感染対策に違いがあるものの、手洗い消毒や三密を避けることなど、基本的に心掛けていることは同じで、大人子ども関係なしに世間一般でよく言われている新型コロナ対策を意識し、できていることは確かだ。

このようにしてそれぞれが感染対策をしっかりとしていることで、「かたろう食堂」に今まで通りとはいかないが、集まることができている。

第八章　みんなで食事をする

「かたろう食堂」では、外遊びやおやつ等の配布で今までの地域内でのつながりを保ち続けることができている。しかし、メインとも言える食事の提供、皆で食卓を囲んでごはんを食べるということが新型コロナの影響で未だに再開ができていない。食事をするとどうしても飛沫が飛び、感染リスクが高くなってしまう。そして、コロナ禍以前の「かたろう食堂」に食事をしに来る子どもたちの人数も多く、どうしても密になってしまうことも再開できない要因となっている。

子ども食堂内での食事の提供ができない代わりに、最近ではフードバンクを行っている子ども食堂が増えているようだ。フードバンクとは、まだ食べられるのに、さまざまな理由

で処分されてしまう食品を、食べ物に困っている施設や人に届ける活動のことを言う。このフードバンク活動を行うことで食に困っている人たちを今まで通りサポートしていくことができるが、どこか寂しい気持ちもする。

ここで、子ども食堂内での食事の提供についての必要性について改めて考えていきたい。子ども食堂は、貧困家庭の子どもたちに無償で食事を提供する場所である。さらに、子どもたちが集まる場所、親御さんたち、近所の人達が集まる場所、地域コミュニティの場として、みんなの居場所として多くの役割を担うようになってきている。

同じ地域に住むいろいろな世代の人たちが集まり、同じ食卓で食事をする。このように同じ地域内の多世代の人達が集まって食事をすることは、現代の日本では少し珍しい光景でもある。

私は、同じ地域内で多世代の人達が交流する場があること自体がまず素晴らしいと思うが、それ以上にそこに行けば、「誰かと一緒に食事ができる場所」であるというところが大切であると思う。このように言ってしまうと、貧困家庭の子どもたちに食事を提供することを重要視していないように聞こえるかもしれない。もちろん、一番大切なことは食事を無償で食べられる場所がある、ということだと思う。しかし、それと同じくらい、誰かと一緒に食事ができるということは大切であると考える。

人間が健康的に生きていくためには、水分補給と食べ物を食べてエネルギーを蓄えることが必要不可欠である。つまり、食事をする目的は生きるため、という人間にとってとても重要なものとなっているわけである。ただ、食事をする目的は、生きるためだけではないと私は考える。もう一つ大事なこと、それが先程から述べている誰かと一緒に食事をすることである。なぜそのように考えるのか、私自身の体験から説明していく。

私は、食べ物に対しての欲が全くと言っていい程ない。この料理が食べたい、あんな料理が食べたい、などの欲を持っていない。私が食事をする理由は、食べないと健康な体でいられないため、死にたくないためである。食事をすること自体に楽しみはない。

しかし、そんな私にも食事が楽しいと思える時がある。それが、誰かと一緒に食事をしている時である。一人で食事をしている時は、本当に寂しくてたまらないため、できるだけ早く食べ終わる料理にしたり、食べ物の量も少なめなものを選んだりして偏った食事をしてしまう。これでは健康に良くない。ところが、誰かと一緒に食事をするとそんなテキトーな食事をすることは無い。食事をする時に話し相手がいる。それだけで寂しいから早く食べ終わりたいという感情は無くなり、食べる量も増える。話す相手がいれば食事も楽しくなり、一緒に食べる人が多い程にぎやかでより楽しくなる。話をしなくとも、家族や友人などの一緒に食事をしてくれている人がいると、どこか安心もする(ただし、嫌いな人でなければ)。

逆に考えてみると、食事は人と人との交流の場にもなり得ると言えるだろう。例えば、自宅で家族と食事をする場面。日常生活で家族全員がそろって話をする機会は食事をする時がほとんどだろう。仕事や学校等がある日は、家族が 1 日を共に過ごす時間はごくわずかである。そのごくわずかな時間こそが食事の時間で、そこで今日あった出来事や、それぞれが思っていることなどを話し、聞き、家族間でのコミュニケーションができる。

食事は、人間が生きるために取る行為であると共に、人と人とが交流し親睦を深めていくためにあるものだ。よくよく考えると、部活動や会社などで、新入生や新入社員が入ってくると、だいたい歓迎会を開いてみんなで食事をする。食事をしながら会話をして、相手がど

んな人間なのかを探って、親睦を深めていく。

このように、誰かと食事をすることは、新しい交流を生み、会話をするきっかけを作り、そこから信頼関係を築くことにつながる可能性がある。

ここで話を子ども食堂に戻そう。子ども食堂の食事提供の一番の対象者は、貧困家庭の子どもたちである。貧困家庭の子どもたちは母子家庭などの片親の場合が多いと考えられる。そうなると、親が働く時間が長く、家でごはんを食べる時も独りで食べているかもしれない。そんな子どもたちが子ども食堂に来て、無料で食事ができる。それと同時に、同世代の友達や、上の世代、下の世代といった多世代の人との交流もできる。そうやっていろいろな人と交流することで、新しい刺激を受け、豊かな心を育んでいくことができる。

ここで、とある子ども食堂に参加している未就学児の母親の声を紹介しよう。

「子ども食堂は、私にとって心のより所でした。平日は主人の帰りが遅く、私 1 人で子どもの世話をしな ければならず、ワンオペ状態です。子ども食堂さんがあれば、安価で栄養のある温かい美味しい食事にありつくことができます。また、普段はバタバタしがちな食事時間も、子ども食堂さんでは家族みな一緒にそろってゆっくり味わうことができます。子どものことを見てくれる（世話してくれる）ボランティアさんもいたりして、私はイライラすることなく、心おだやかに食事をすることができます。本当にありがたい場所です。」

この母親のように、普段は落ち着いて家族と一緒にごはんを食べれない人も、子ども食堂に参加することで家族そろってゆっくり食事の時間を取ることができている。このように、普段はできない子どもとの食事での交流が子ども食堂に参加することで可能になっているのだ。

コロナ禍での子ども食堂についての独自のアンケートで、子ども食堂に参加している子どもたちに、「今、子ども食堂でやりたいことを教えて下さい」という質問をしたところ、全体の約 6 割が「遊びたい」、約 3 割が「みんなでごはんを食べたい」という結果だった。「かたろう食堂」はコロナ禍の現在、公園での外遊びがメインとなっているため、子どもたちもコロナ禍でできることを考えて、「遊びたい」という結果が多くなっているとも考えられる。しかし、コロナ禍であっても、やはり「みんなでごはんを食べたい」と思っている子どもが全体の約 3 割いるということで、改めて子ども食堂での食事提供、「皆でごはんを食べること」の重要性が感じられる。

しかし、このコロナ禍で今まで通りたくさんの子どもたちを子ども食堂に受け入れて、みんなでごはんを食べるということはまだまだできそうにない。2020 年は新型コロナウイルスが流行し、人と人との交流が思うようにできない年となった。現在も新型コロナウイルスの新規感染者が増え続けており、そんな中でたくさんの人を集めて食事をすることはなかなか難しい。先の見えない不安が続く日々ではあるが、新型コロナウイルスが流行したおかげで、子ども食堂や、いろいろなお店で、皆で食事をするという行為がどれだけ楽しかったか、気分転換になっていたか、心の癒しになっていたかを改めて知ることができた。

このコロナ禍で、全国にある多くの子ども食堂では、今までと同じようなみんなでごはんを食べるという活動は難しいだろう。しかし、公園での外遊びなど、感染対策をしっかりして工夫しながら活動を続けていくことは、大変だが、せっかくできた子ども食堂でのつながりを途切れさせないためにも、とても大切なことであると考える。第五章でも述べた様に、子ども食堂を広く知ってもらうには、地域内での交流、つながりの輪を広げていくことが大

切であるため、活動せずに交流やつながりを絶ってしまえば子ども食堂を知ってもらう機会が無くなってしまう。

何より、子ども食堂に行くことを楽しみにしている人たちはたくさんいる。その人たちのために、大変だと思うが、みんなで協力しながら、何かしらの活動を継続していってほしい。そして新型コロナウイルスが早く終息し、また子ども食堂でみんなが笑顔でごはんを食べれることを心より願う。

参考文献

・「フードバンク化する子ども食堂　コロナ禍の変容」成元哲
・CLINIC FOR　2020 年 4 月 27 日「新型コロナウイルスに関に関連する 3 密、ソーシャルディスタンスとは？クリニックフォアグループの医師が解説します。」
(https://www.clinicfor.life/articles/covid-012/)
・子ども食堂アンケート調査票
・サンクスカード
・自主制作による「かたろう食堂」に対するアンケート

謝辞

本稿の調査及び執筆にあたり、ご協力いただきました子ども食堂の方々に厚く御礼申し上げます。そして「かたろう食堂」の皆様、突然の訪問にもかかわらず、快く受け入れていただきありがとうございました。たくさんのアンケート調査にも協力いただきありがとうございました。「かたろう食堂」でのスタッフの方々の温かさに触れ、普段では関わることができない子どもたちと一緒に遊ぶことができてとても楽しかったです。このような経験ができて本当に良かったです。また、共にアンケートの集計やグラフの作成したゼミの同級生の皆様、本当にお疲れ様でした。この場を借りて改めて深く御礼申し上げます。